

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 5 月 14 日現在

機関番号：34304

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2014

課題番号：22520338

研究課題名(和文)絶対王政期におけるイタリアの文化的環境の変容および「ガリレオ事件」の位置づけ

研究課題名(英文)Change in the Italian cultural atmosphere during the period of absolute monarchy and the Galileo affair

研究代表者

小林 満 (KOBAYASHI, Mitsuru)

京都産業大学・外国語学部・教授

研究者番号：50242996

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：絶対王政の理論的な正当化が進んだ16～17世紀、カンパネッラはキリスト教的都市国家を目指し、ブルーノも社会改革に触れたが、両者とも自由に哲学することを禁じられ迫害された。

『偽金鑑識官』における原子論もガリレオを異端者と判断する原因となったが、異端審問後には、ガリレオは数学的議論として不可分者と無限について論じているものの、有限の人間の知性は無限を理解できないという慎重な態度も見せた。

ガリレオ裁判後、イタリアのガリレオ派には、マガロッティのようにリベルタンのテーマにも取り組んだ者もいたが、マルケッティによるルクレティウスの翻訳は、原子論的性格のために出版を許可されなかった。

研究成果の概要(英文)：From the 16th to the 17th century, when the theoretical justification of absolute monarchy was advanced, Campanella, who worked toward founding an ideal Christian city state, and Bruno, who mentioned social reform, were both forbidden to philosophize freely and persecuted.

After the Inquisition in which the atomism mentioned in The Assayer contributed to the judgement of Galileo as a heretic, in a prudent manner he treated the indivisible and the infinity as a mathematical discussion and said that limited human intelligence is not able to understand infinity.

After Galileo's trial, there were those who worked on a libertine theme such as Magalotti in the Galilean school, but the translation of Lucretius by Marchetti was not allowed to be published due to its atomistic character.

研究分野：イタリア文学

キーワード：イタリア文学

1. 研究開始当初の背景

(1) 2004 2007 年度の基盤研究(C)「ガリレオの学術論争における「説得の技術」の変容およびバロック期の言語表現との関係」においては、1613年の「カステッリ宛の書簡」のなかでガリレオが聖書と自然学の関係を整理してコペルニクス説のほうがアリストテレス・プトレマイオス体系よりも優位にあることを証明したものの、その論理の攻撃性もあって、宗教的な論争に巻き込まれてしまったので、その反省から、『偽金鑑識官』から『世界の二大体系についての対話』へと執筆活動が展開していくにつれ、彼の説得の技術が、論理的に敵を打ち負かすだけでなく、「たとえ話」をも導入して、読者をより引き込むものへと進化していったことを明らかにした。

(2) また、同研究では、バロック詩人マリーノがその詩作品『アドーネ』のなかで、望遠鏡を「遠くにあっても、対象を非常に拡大して、誰の感覚にでも近づける道具」と位置づけているとおり、「感覚」に奉仕する新器具の発明者としてのガリレオを賛美し、海の航海者=地理的征服者コロンブスと天空の航海者=自然哲学的征服者ガリレオという2人のイタリア人を新時代の象徴として描いていること、マリー・ド・メディシスの招聴によってパリの宮廷に登ったマリーノがこの作品をフランスで発表したことを考え合わせると、ガリレオの存在がいかに国境や領域を越えた「事件」であったかの証左と言えることを指摘した。

(3) 上記の研究を進めて行く中で、「ガリレオ事件」をイタリア半島の文化的環境の歴史の中に位置づけることで、それが起きた背景とそれが与えた影響を理解する必要性を感じた。

2. 研究の目的

(1) 本研究は、16世紀後半から17世紀にいたる絶対王政期のイタリアにおいて、知識人たちが真理の探究に対してどのような態度で臨んでいたかを、また、その態度の変容を追うことで、イタリアが18世紀以降ヨーロッパの知的リーダーの座から降りてしまった理由と、その決定的な契機が「ガリレオ事件」であったことを確認した上で、政治史・科学史・文学史・思想史の枠組みを越えて、総合的にヨーロッパの「近代」を準備した環境を理解することを目的とする。

(2) トレント公会議(1545年 - 1563年)以降、イタリア半島は対抗宗教改革の時代に入って、異端審問をはじめとするカトリック教会による弾圧のために自由な思想が抑圧され始める。「国家理性」という概念を確立し、国家・政治と宗教・倫理を一致させてスペインのイタリア支配を認める基礎を与えたジ

ョヴァンニ・ボテロ(1544年 - 1617年)などの政治思想家の出現によって、絶対王政と教会権力との結びつきが確認される時代になったのである。ただし、これと同じ背景を持ちながら、位相を異にするユートピア思想(フランチェスコ・パトリッツィの『幸福な都市』(1553年)やトンマゾ・カンパネッラの『太陽の都市』(1602年)など)が生まれたことにも留意する必要がある。また、いまだ強い力を保持していたヴェネツィアでは、自由な思想を育む風土があり、パオロ・サルピ(1552年 - 1623年)のように、トレント公会議そのものを断罪し、対抗宗教改革に反旗を翻す人物も現れた。

さらには、コロンブスの新大陸到達をはじめとする大航海時代に入った16世紀のヨーロッパは、新たな知見を得て、従来とは異なった自由な思考を行なうことに対して回路が開かれた時代に入ってもいた。そして、15世紀には教会と大学と宮廷が知識人の活躍する場であったが、16世紀から17世紀にかけては新たな文化の創造の場が生まれた。それはアカデミーである。フィレンツェのクルスカ・アカデミー(1583年)のように一国の言語政策を担うことになったものもあったが、基本的には貴族や商人たちが趣味のために集まったサークルとして誕生していくことになる。なかにはリベルタン(自由思想家)たちの集会の場となることもあった。ローマのリンチェイ・アカデミー(1603年)をはじめとしてボローニャ、ミラノ、ナポリ等、イタリア各地でアカデミーが誕生した。

以上のような状況のなかであって、イタリアの知識人は対抗宗教改革=絶対王政を背景とした保守的な思想と自由で進歩的な思想の両極で、揺れ動くことになるのである。

(3) 時代が進んでいくと、絶対王政の環境で生きて行くために、正論を堂々と展開しているわけにはいかない知識人も出てくる。たとえば、その代表がトルクアート・アッチェットで、その著作『誠実な隠蔽』(1641年)では、理想は心の中だけに秘めておき隠蔽すべきだといった、宮廷生活における処世術が推奨されることとなるのである。

このように知識人が「仮面」をかぶらざるを得ない環境へとほぼ完全に変わっていった。目に見える事実を最重要視したガリレオでさえも、主著『プトレマイオスとコペルニクスの世界の二大体系についての対話』(1632年)を3人の登場人物の会話という形式で、著者自身の主張を行っていない体裁にしたのであった。実際のところ、ガリレオの天文学上の新発見は、大航海時代における未知の世界からもたらされる新しい知見とともに、新たな世界の可能性を具体的に示すものであり、旧来の思考の枠を破壊する知的な爆発力を秘めたものであった。最初のうちガリレオは感覚をとおして経験された真実を躊躇せずに発表し、いくつもの論争を行

なっていったのであるが、聖書と自然学との関係について発言していくなかで、次第に慎重になっていった。しかし、その努力もむなしく、最終的には異端審問を受けた結果、異端誓絶を余儀なくされた。

この「ガリレオ事件」の結果、イタリアの自然科学研究者たちは、天文学の領域での発言を避けるようになった。しかし、ガリレオが築き上げた明晰な言語表現の伝統は、フランチェスコ・レーディ（1629年 - 1698年）やロレンツォ・マガロッチ（1637年 - 1712年）等の弟子たちやチメント・アカデミーに受け継がれた。

以上のような流れで、「ガリレオ事件」を中心に絶対王政期のイタリアの文化的環境の変容の具体像を総合的に理解することを目指した。

3. 研究の方法

(1) 「ガリレオ事件」の具体的な内容をまとめるため、ガリレオの天文学上の発見に始まる彼の自然科学上の研究成果を踏まえた上で、彼が聖書解釈に踏み込んだ経緯を見た後に、ガリレオ本人や周辺の関係者たちの書簡等を読み込むことで異端審問にいたる状況を明らかにする。

(2) 絶対王政を支える思想を展開したジョヴァンニ・ボテロの著作を分析することで、「国家理性」の概念や当時のイタリア半島の政治状況に対する彼の思想をまとめる。さらには、ボテロに反対の立場の思想を理解するために、トライアーノ・ボッカリーニの著作『パルナッソスについての報告』（1615年）等を分析する。

(3) ユートピア思想を展開したパトリッツィヤカンパネッラの著作を分析した上で、ジョルダノ・ブルーノをも取りあげて、当時の政治体制と教会権力との関係を分析する。

(4) イタリアにおけるアカデミーの機能やリベルタンたちの活動を概観する。

(5) ガリレオの弟子や後継者たちが「ガリレオ事件」からどのような影響を受けたかを見ながら、どのような文化活動をどんなネットワークを構築しながら行なっていったかを考察する。

(6) 以上の研究を遂行するために、ボローニャ、フィレンツェを中心に、国立図書館や大学図書館等に赴いて、思想領域・科学史領域・文学領域の資料収集を行なう。

4. 研究成果

(1) もともとはイエズス会士であったジョヴァンニ・ボテロは、その著作『国家理性について』で政治的権威と宗教的権威が調和する姿を描くことで、スペインによるイタリ

ア支配の理論化を進めた。それに対して、トライアーノ・ボッカリーニの『パルナッソス詳報』は、アポロンが支配する王国パルナッソス山で起きる出来事や、有名な文人や政治家たちからなる住民たちがヨーロッパ(とりわけローマ)の政治的現状に対して行なう議論などを地上に報告するといった形式をとった作品である。ヴェネツィア的な共和政を理想とし、スペイン王国と教会の同盟に反対する立場をとったボッカリーニが、内容としては欺隔に満ちたイタリアの政治を揶揄しているのであるが、想像界での出来事という隠喩の形を用いている。このパルナッソス山で行なわれた裁判では、マキャヴェッリは、君主の冷酷な政治手法を民衆に教えることで、「羊」に「狼」になる方法を教えたとして裁かれる。換言すれば『君主論』を共和政に引き寄せて解釈する道を拓いたとも言えるのである。

(2) ジョヴァンニ・ボテロが『国家理性について』で政治的権威と宗教的権威が調和する姿を描くことで、スペインによるイタリア支配の理論化を進めたことに代表されるように、絶対王政の理論的正当化が図られていった16世紀から17世紀には、理想的な国家像(ユートピア)を描く思想家たちも現れた。16世紀半ばに哲学者フランチェスコ・パトリッツィ・ダ・ケルソは自らの理想とする都市像を『幸福な都市』のなかで展開し、16世紀後半にはルドヴィーコ・アゴステイーニも『空想国家(共和国)』を著わしている。パトリッツィは『詩学について』のなかで模倣の原理を否定し、芸術は個人の想像力によるべきだと主張した。

17世紀のユートピア論の代表作『太陽の都市』を執筆した時期のカンパネッラは、スペイン支配から南イタリアを解放してキリスト教都市国家を作ることを目指していた。しかし、蜂起失敗後は、スペイン王国、教皇、またフランス王国による世界統治へと立場を転換した。カンパネッラの思想は簡単に要約できない内部矛盾も含む複雑なものであったが、「3つの巨悪、すなわち専制政治、詭弁、偽善を根絶するために私は生まれた」という詩句にあるような、知識人の態度では一貫していた。

この知識人の態度は、哲学者ジョルダノ・ブルーノにも共通して見られ、たとえば『驕れる野獣の追放』のなかでは、今では悪徳の象徴となっている古代以来の星座群を新たな美徳の星座群へと改革するという寓話的な語り方で、社会改革が語られている。また、ブルーノは『英雄的狂気について』のなかでアリストテレスの詩学の規則に縛られている現状を否定し、詩作における個人的な情熱を重視しており、パトリッツィとも同じベクトルを有していたと言える。伝統的な世界認識の在り方を覆したブルーノ、カンパネッラ、そしてガリレオが対抗宗教改革を経

た教会と衝突することは必然的な結果であったと言える。

(3) 当初コペルニクス説に反対していたイエズス会士の天文学者ジョヴァンニ・バッティスタ・リッチョーリの存在の重要性を確認し、文献収集を行なった。ポローニャ大学で彼の主著 *Almagestum nouum...* の全ページをデジタル撮影の形で収集した。また、リッチョーリが活躍したポローニャは「ガリレオ事件」以降文化的重要度を増していくこともあり、今まで比較的日本でもよく研究されていたヴェネツィア、パドヴァ、フィレンツェ、ローマ等とは異なった視点からこの時代を見るのに、この都市の文化的環境を研究する必要性を確認した。絶対王政期のポローニャでは、ジュリオ・チェザレ・クローチェの活躍が民衆世界の発見という視点からも重要である。『ペルトルドの非常に鋭い抜け目なさ』と『ペルトルディーノの愉快でおかしな馬鹿さ加減』は彼の作品として有名であるが、アドリアーノ・バンキエーリが3人目のキャラクターとしてカカセンノを加えることで、喜劇トリオが完成したことは注目に値する。クローチェとバンキエーリ双方の「方言」の再評価を含め、彼らの出版活動を中心にして、この時代のポローニャの文化的環境をさらに研究する必要性が確認された。

(4) ガリレオが聖書解釈に踏み込んだ経緯を明らかにした。数学的言語で書かれた書物である宇宙=自然が数学的言語で理解し得ると同様に、比喻で書かれた書物である聖書を比喻で理解し得るとガリレオは考え、「カステッリ宛の書簡」等でそれを実践してしまったのである。そしてその際に、自然哲学の論理を持ち込んでしまった。聖書を根拠に自然学に容喙する神学者と同じことをしてしまったと言える。

その後のガリレオに関しては、「無限を認識すること」についてガリレオがどう考えていたかを理解することが、自然学や数学と神学のはざまでの彼の真理の探究について考察する手掛かりになると考えて、「無限」に関する資料を多く収集した。ジョルダノー・ブルーノは無限を2つに区別した。「縁も、果ても、表面もない、全体として無限」の宇宙、そして「全体として無限」でありかつ「全体として世界全体に存在し、その個々の部分にも無限にかつ全体にわたって存在する、全体にわたって無限」の神であり、ブルーノは前者を考察の対象とした。また、万物を無限に分割したときの不可分者としての原子をも想定した。それに対して、ガリレオは『新科学論議』の中で、数学的議論として不可分者と無限について論じているものの、リチエーティ宛の書簡(1639年)でガリレオは宇宙が有限か無限かについて触れ、「無限は、その性質上、限界を定められている私たちの知性によって理解(=包含)されることはあり

得ない」と言って、有限存在である人間の知性が無限を理解できないことを確認している。人間の理性や想像力の及ばない無限に対して慎重な姿勢をとっているのである。

しかし、ガリレオは『偽金鑑識官』(1623年)の中で、たとえば味覚について、「降下する微粒子は、舌の表側の上で受け止められたのち、舌のなかに浸透し、舌のなかにある水分と混ざり合って、味覚を引き起こすのだ。その味覚が快いか不快かは、さまざまな形状をもったそれら微粒子のさまざまに異なる接触の仕方に、さらにはそれら微粒子の数の多寡や速度の大小に応じているのである。そして位置に関して言えば、舌は適切な場所にあることがはっきりわかる。舌は降下してくる衝撃を受け入れるために下方に横たわっているのである。」と述べているが、このような原子論的な立場もガリレオを異端審問で不利な状況に至らしめたことは、ピエトロ・レドンディの名著『異端者ガリレオ』(1983年)で明らかにしたとおりである。

(5) 「ガリレオ事件」後のガリレオ派の学者たちの研究姿勢については、その中心的な人物として、17世紀後半に活躍した2人、トスカーナ大公フェルディナンド2世の主治医を務めたフランチェスコ・レーディと、ガリレオの実験主義の精神を継承して1657年創設されたチメント学会書記を務めたロレンツォ・マガロッティについて分析した。両者ともガリレオの実験主義の精神を継承しており、チメント学会会員であったが、同時にクルスカ学会会員でもあり、前者は『クルスカ辞典』第3版の編纂にも加わり、言語学者の側面をあわせ持っていた。またマガロッティはアルカディア学会にも加わっており、両者とも自然学領域と文学領域にまたがる活動を行なっている。

レーディの主要著作『昆虫の発生をめぐる実験』(1668年)は生物の自然発生説を対照実験を用いて否定したものであるが、科学的記述だけではなく、ウェルギリウスからアリオストにいたる数多くの古典作品を引用した博覧強記の作品となっている。さらにレーディは長篇詩『トスカーナのバッカス』(1685年)を書いており、その中では、酒神バッカスがトスカーナを巡って五百にも及ぶ各地のワインを試していき、最後にはモンテプルチャーノ・ワインに栄誉を授けるまでが描かれている。一方、マガロッティはその著作の中で、ガリレオが残した「ワインは水分と光の合成物である」という言葉について文学と科学の混淆した検証を行なっているが、レーディの作品と関心を共有していることが看取できる。ガリレオ派の中には、このように知的快楽として自然研究を行なう学者が存在していた。

ガリレオに対する異端審問とガリレオによる異端誓絶の後、イタリアは哲学の領域で自由に発言する環境でなくなってしまった

が、ガリレオが礎を築いた「新科学」の流れは絶えなかった。物理学と数学の領域では、ガリレオの弟子のカヴァリエーリとトッリチェッリが活躍した。一方、生物学の領域ではフランチェスコ・レーディの他、ジョヴァンニ・アルフォンソ・ボレリ、ロレンツォ・ベッリーニ、マルチェッロ・マルピーギ等々の研究者が生物学領域では大きな伝統を作っていた。チメント学会でも活躍したロレンツォ・マガロッチは、リベルタ的なテーマにも取り組み、迷信や奇跡に対して批判的な態度を示している。このような流れの中にあつて、アレッサンドロ・マルケッティは、ルクレティウスの『物の本質について』をイタリア語訳したが、原子論を主張するこの翻訳は出版を許可されなかった（写本の形で広まった）。原子論に対してはトスカーナ大公コジモ3世（在位 1670-1723）がデモクリトス哲学（原子論）を教えることを禁じたことから、自由に哲学的な議論をする環境は17世紀後半にはまったく望めなかったことは明らかである。

前述した「ガリレオ事件」の真相を考えれば、ルクレティウスのイタリア語訳の出版禁止措置も当然であった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計2件)

小林 満、ジュリオ・チェザレ・クローチェとその生地サン・ジョヴァンニ・イン・ペルシチエートのカーニヴァル、地中海学会月報、査読無、352号、2012、3

小林 満、La lingua di Galileo, Atti della settimana della lingua italiana、査読無、4巻、2010、74-78

〔図書〕(計1件)

小林 満 他、Istituto Italiano di Cultura - Tokyo、Ricerche, scoperta, invenzione: l'Italia dei saperi、2014、161 (68-74)

〔その他〕

小林 満、ガリレオ・ガリレイ生誕450周年記念講演「イタリアの食文化とイタリア語とガリレオ・ガリレイ」(NPO イタリア語検定協会主催イタリア語イベント in 福岡での記念講演、2014年、イタリア語検定協会会報 Le Ali 第19号1頁に要旨を掲載)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小林 満 (KOBAYASHI, Mitsuru)
京都産業大学・外国語学部・教授
研究者番号： 50242996